コロンビア大学での研究生活

瀧井光夫

学務に専念させられた四年間を終え、サバティカルを得てコロンビア大学で半年間の研究生活を送った。身分は、経営大学院所属の日本経済経営研究所（ＣＪＥＢ）客員研究員。留学は若い時期にすべきであろうが、この歳になっても海外から得ることは実に多い。ご参考になることがあれば幸いである。

地域に開かれた研究所の活動

コロンビア大学を選んだのは筆者が前職時代、延べ八年余をニューヨークで過ごし、友人からの紹介もあり、また所長のヒュー・パトリック教授にも面識があったからである。筆者が入所した〇七年八月には、すでに日本の私立大学教員五名と民間、政府機関から派遣された七名が在籍し、それぞれ独自の研究課題に取り組んでいた。

コロンビア大学は東アジア研究の一大拠点である。ＣＪＥＢのほかにウェザーヘッド東アジア研究所、ＡＰＥＣ研究所、中国教育センター、韓国研究所、中世日本研究所、ドナルド・キーン日本研究センターなど十二の研究所がある。ウェザーヘッド研究所にも日本や中国から来た客員研究員がいるが、客員研究員に対する面倒見のよさはＣＪＥＢが抜群だった。

研究員の帰国、到着ごとに開かれる歓迎・送別昼食会、新学期前のバーベキュー・パーティー、十二月の年末パーティのほか、研究員が自分の研究テーマを発表し、所長の司会で討議を進める毎月定例の昼食会など行事は実に多彩である。もちろんこうしたことばかりではない。研究所主催あるいは他の研究所などとの共催で頻繁に講演会やシンポジウムが開かれる。その多くが学外にも公開され、その後のレセプションは活発な意見交換の場となる。こうした催しに参加するたびに、地域における知的拠点として大学の役割に共感したものである。

研究所には財務管理や報告書の作成など雑多な仕事も多いが、こうした催しもすべて研究所の教授たちと十名余りのスタッフでこなしている。彼らの仕事振りも鮮やかだったが、潤沢な研究所の懐具合もうらやましい。研究所には日本企業からの寄付も多いようだが、これは日本の政財界に広い人脈をもつパトリック所長の精力的な活動によるところが大きいようである。

講義風景とＴＡの働き

住居を除いて客員研究員は大学のほぼすべてのサービスを利用できる。先生の許可があれば講義の聴講も可能である。スティグリッツやバグワティの講義にも関心があったが、すでに講義はやっていなかった。筆者は、経営大学院ではレイモンド・ホートン教授の現代政治経済論、国際関係公共政策大学院（ＳＩＰＡ）ではアービンド・パナガリヤ教授の国際貿易論、ジェラルド・カーティス教授の日本政治の三科目を聴講した。メールで聴講の許可を求めると、先生から折り返し了解したとの返事が来た。また、学期末に聴講のお礼を述べると、「講義をエンジョイできてよかった」と返事をもらった。聴講生にも迅速で暖かく対応してもらったことは有難く、日本でも見習わねばと思ったものだ。

講義は、現代政治経済論は一回九〇分で週二回、他は一一〇分で週一回。講義のやり方はそれぞれだが、誰もマイクは使わない。百人位が出席しているカーティス先生の教室では、聞えなければ前に来るようにと言うだけである。すべての先生が授業前には教室に来ていて、時間通りに終わる。講義でも学生は積極的に挙手してどんどん質問する。先生も学生に質問して理解の程度を確認している。

パトリック先生が「学部生の入試は全部大学がやるが、院生の選考は院の名声にかかわるからすべてわれわれがやる」と言ってい

た。もちろん高い授業料を払う学生の方も授業の質に強い関心を持っている。こうした教える側と教えられる側との緊張関係が教室の空気にも反映している。

現代政治経済論では原典を抜粋した分厚いテキスト二冊が事前に配布されたが、学生も講義に関連する新聞や雑誌の記事、調査資料など自分で読んで興味深かったものを学内の電子メール・システムで受講者に送ってくる。自分だけ読んで満足せず、情報を共有しようとわけである。国際貿易論では、CourseWorks@Columbiaというシステムを使ってTA（ティーチング・アシスタント）から履修登録者に補習の連絡や練習問題などが送られて来た。

先生によってTAの使い方は異なるが、TAは毎回授業に出席して、授業内容や学生の反応を観察している。試験やレポートの採点など講義以外の仕事はすべてTAに任せている先生もいる。それだけにTAの報酬はかなりのものらしい。反面、評価も厳しく、期末にはTAに対する評価表が学生に配られていた。このように大学院におけるTAの役割は非常に大きく、教員の負担が軽すぎるという批判も出ているほどである。しかし、コロンビアは研究のための大学だから他とは違うという教員側の自負も非常に強く、コマ数も週二回程でしかない。

膨大なデータベースにアクセス

コロンビア大学のモーニングサイド・キャンパスには三〇余りの図書館がある。筆者の研究テーマで一番役立ったのは、経営大学院のワトソン図書館とSIPAのリーマン図書館の二つである。ワトソン図書館は経営大学院のあるユリス・ホールの約半分を占める。一階と二階の壁側にはグループ学習のためのガラス張りの小部屋が並び、集団で勉強している。試験が近づくと、小部屋に入りきれない学生が一階の閲覧室に溢れ出てくるため実に騒々しい。しかし、三階は一人用の机が開架式の書庫の周囲に配置され、実に静かで快適だった。図書館の中にグループで勉強ができるエリアが設けられているのが、ここの特色らしい。リーマン図書館にもあるが、ここのグループ学習室は教室の延長のようで、かなり奥まったところにある。このため閲覧室には学習室からの雑音は届かず、図書館の研究環境は申し分ない。

図書館で最も恩恵に浴したのは、全米の学術誌、研究所の刊行物、統計など、日本では簡単に手に入らない実に膨大な資料のデータ・ベースである。オンラインで検索した論文を隣接するプリンターに送れば全文を自動的に印刷できる。コピーの枚数制限は一日あたり百枚だが、コピーも含めてすべて無料である。ここから多くの資料を入手することができたが、データ提供先との契約で利用できるのは、UNI（University Network ID）を持っている学生、客員研究員、教職員など学内者だけである。学外者は図書館に入れても、これは利用できない。

なお、蔵書は学内共通のコピー・カードで複写できる。料金は一枚五セント。カードに残高がなくなれば、コピー機の隣にある機械でチャージすることができるから便利である。

留学生の世話係ISSO

コロンビア大学には南カリフォルニア大学、ニューヨーク大学に次いで多くの留学生がいる。〇七年度の在籍外国人数は学生四九七〇人（全学の二〇％）、研究者一三二七人。出身国は一五三ヵ国に及んでいる。

彼らの世話を一手に引き受けているのがISSO（International Students and Scholars Office）である。入学やビザ手続きのほか、新学期初めには安売り家具店イケアに週末買出しのバスを出し、格安費用でボストンとワシントンにそれぞれ一泊二日のバス旅行も行っている。同伴家族のための親睦会やセミナー、市内の行事案内など頻繁にメールで案内が来る。学期はじめに副学長主催で行われた歓迎レセプションは楽しい交流の場であった。留学生が多い筆者所属の大学院でも、かなわぬことだが、ISSOのようなことができればと思った。

なお、IISOの年次報告書によると、〇八年度の国別留学生数は、最大が中国の八六八人（留学生全体の一六・三％）、次いで韓国六〇〇人、インド四二一人。日本は二一二人で中国の四分の一、韓国の三分の一となった。日本人留学生の影は次第に薄くなっている。

（たきいみつお・桜美林大学教授）